

書物奉行と紅葉山文庫② 鈴木白藤

氏家幹人

はじめに

本稿は「書物奉行と紅葉山文庫① 鈴木白藤」〔『北の丸』第五十一号〕に引き続き、文化九年（一八一二）から文政四年（一八二二）にかけて書物奉行を務めた鈴木白藤（通称岩次郎、名は成恭・恭ほか）の事績の一端を紹介するものである。

前号で述べたように、鈴木白藤（一七六七—一八五二）は生前多くの随筆や日記を綴ったにもかかわらず、そのほとんどが現在所在不明で、書物奉行、そして蔵書家として知られる彼の活動全般を跡付けることは難しい。わずかに東京大学史料編纂所が『漫抄』と題する一冊（八十四丁）を所蔵しているが、その内容は幕府の記録などの抄録で、白藤自身の活動を示すものとは言い難い。それだけに、幕末の幕臣千坂畿（一七八七—一八六四）の『名園記』に収められた白藤の随筆・日記の抄録は貴重だ。

千坂畿は、通称一学。号は廉斎ほか。昌平覺（学問所）で古賀精里（一七五〇—一八一七）に学び、文化十年（一八一三）に学問所出役を拜命、文政三年（一八二〇）に幕臣千坂権平の養子となり（それまでは吉田姓を称していた）、養父の跡を継いで御徒を務めた。森銑三「千坂廉斎」〔『森銑三著作集』第四卷所収〕によれば、千坂姓を称する前に江目姓を称したこともあったらしい（なお千坂畿の閲歴について本稿はすべて森銑三の著述に拠っている）。天保七年（一八三六）に五十歳で表火番に転じたのち、翌

八年に隠居、莞爾と称した。隠居後は家塾を開き、数百人の来塾者があつたという。元治元年（一八六四）、錦糸堀十六間屋敷（現・墨田区内）の家で永逝。享年七十八。

江戸文学に通じた書誌学者の三村竹清（一八七六—一九五三）が、千坂の雑多な抄録の記事を編集し『廉斎問話』と名付けた書が、『藝林叢書』第五卷に収録されている。同書には師の古賀精里や野村篁園などのほか、白藤の興味深い逸事や談話も収められている。うち一話はすでに前号で紹介したが、千坂と白藤の関係を振り返る意味で、ここでもう一例拾ってみよう。文化八年（一八一三）、精里が朝鮮通信使の応接役として、林述斎らと対馬に赴いたときのことだという。精里は肥前佐賀の出身で、佐賀藩の藩校弘道館の教授を務めたのち、幕府の儒官となっていた。対馬出張に際しては佐賀に持参する「江戸土産」を用意しなければならぬ。そうと察した千坂は、精里に山東京伝の草双紙を贈った。江戸の人気作家の娯楽小説が佐賀で喜ばれると思つたのであろう。『廉斎問話』はこう記している。

対州へ出立の餞別に、京伝作の草冊子を呈して、御国元の御土産になさるへしといひしか、表紙に、市川家隈とりの顔あるを見玉ひて、これがさ、唐にない□（氏家注・「白」の下に「ハ」）だと、宣ひし、後日白藤にはなしたれば、唐でも日本でも、あんな顔があつて、たまるものかと、いひて笑ひたりき

—京伝の著作の表紙に「市川家隈とりの顔」(歌舞伎役者の市川団十郎が隈取を施した顔の絵)があるのを見た精里先生は、「こういう顔は唐(中国)にもないよね」(意訳)とおっしゃった。後日その話を白藤にしたところ、白藤は「あんな凄まじい顔は、唐だけでなく日本にもいるわけじゃないと言って笑った」(同)。

表紙の顔はあくまで荒事のメイクなのに、先生(精里)はどうやらそれがよく分かっているようにだ(実際にこのような男がいると誤解しているのかも)、と、白藤は高踏的で世間離れした精里の言葉に失笑したという。あるいはなにかにつけて唐を意識し和漢を比較する漢学者の習性をなかなば自嘲的に笑ったのかもしれない。

いたってさりげない場面だが、古賀精里と千坂畿(廉齋)、鈴木白藤(白藤は書物奉行に就任する前は学問所勤番組頭だった)という、昌平覺知識人たちの日常的懇談の雰囲気がかがえる。白藤の娘が精里の三男小太郎(古賀侗庵)に嫁いだことも親密さの所以に数えられる。千坂は白藤より二十歳年少だが、両者もまた腹藏なく会話をかわす間柄だったらしい。だからこそ千坂は白藤の随筆・日記を借覧して、そこに記された白藤の江戸大名庭園などの遊覧記を『名園記』の一書に編むことができたのだろう。

『名園記』と『東京市史稿』遊園篇

『名園記』は当館が所蔵する宮崎成身の雑録『視聴草』続編七の九に「名園記并詩」と題して綴じられている。

宮崎成身は幕府の旗本で、通称次郎太夫。百拙齋、栗軒と号し、牛込神楽坂下の屋敷が牛込門に程近いことから牛門老人とも称した。天保十二年

(一八四一)に家督を継ぎ、西丸小性組、小十人頭、持弓頭を歴任したのち、安政五年(一八五八)に老衰と病のために御役御免となった。没年はさだかでない。宮崎はこの間、『朝野旧聞哀藁』『大狩盛典』『通航一覽』ほか幕府の編纂事業に携わった。編纂作業はおもに学問所で行われ、昌平覺人脈の千坂とも親交があったと想像される。

『視聴草』は、宮崎が文政十三年(一八三〇)から、手元にある様々な資料や記事を綴じたもので、当館に百七十六冊現存する(請求番号 二一七—〇〇三四)。「名園記并詩」の末尾に「こは千坂畿か筆記する所を採擷してここに録す」とあり、『視聴草』に綴じられたのは『名園記』の摘録(採擷は摘取と同義)だったことがうかがえる。『名園記』の原本の存在は知られていない。抄録とはいえ、白藤の随筆・日記が二十数回にわたって筆記されている同書は、江戸庭園研究の史料として貴重なばかりでなく、鈴木白藤の交友や活動(さらには江戸の知識人サークルの様相)を知るうえで他に得難い文献と言える。

『名園記』は早くからその史料的价值が注目されていたようで、明治十一年(一八七八)、東京府記録科が編纂した『東京府文献叢書』甲集第七十五冊(東京都公文書館蔵)に全文が翻刻されている。東京府記録科は、明治九年(一八七六)六月の「東京府庁例規」によって、文書の整理・編製を担当する部署として新設。甲乙第七十五冊には「東京府記録科編脩記」の蔵書印が捺されている(記録科については『東京都公文書館だより』第二十四号参照)。翻刻原稿は目次とも「東京府」の罫紙六十六枚に筆記され、末尾に左の記がある。

書中金令子又ハ夢蕉トアルハ書物奉行鈴木岩次郎 名ハ恭 号白藤
ト云人ナリ乍老篇続視聴草ノ中ニ収メタルヲ写シ得タリ 原書ノ末ニ

コハ千坂畿力筆記する所を採擷して録すトアリ 十一年八月廿一日
編脩部

『視聴草』続編所収の『名園記』に目次は付されていない。記録科編脩部は翻刻に当たって左のような「目次」を作成した。

名園記目次

紀州公苑中勝景
目黒島原侯別業
麻布久保帯刀園
谷中林氏別業
桃園
高田水野羽州中山備州邸 松平壺州邸
白山郡山侯山林 染井御菓園
極楽水松平播州侯邸
大塚白川侯別業
山王園城院
箕田島原侯別業
稻荷堀酒井雅楽頭別業
新銭座会津中屋舗
業平橋西尾侯別業
浜町姫路侯別業
島津侯園中十景
牛門十景 東豊山十五景
番場秋山内記別業

高田松岡侯別業
日暮里林祭酒別業
染井藤堂侯別業
高田中山侯別業

翻刻は、読みやすさに配慮してか送り仮名など原文と異なる箇所があるほか、誤読箇所もある。しかし一方で、明治十一年当時の「現状」などを記した頭注もあり史料的に貴重だ。たとえば「谷中林氏別業」(『視聴草』の原文は「林氏別庄」)に「按ニ此荘ハ林氏ノ抱屋敷ニテ谷中の本村ニアリ」、「高田水野羽州中山備州邸」(同「水野羽州中山備州邸」)に「二邸共ニ下戸塚村ニアリ」の注記があり、「極楽水松平播州侯邸」(同「極楽水播磨侯邸」)では文中の「善竹」を、「竹尾善筑ナルヘシ」と修正している。「染井藤堂侯別業」(同「染井藤堂侯の別業」)で、庭園内の「大盤銅」について「今此盤延遼館にあり」とあるのも注目される。

『名園記』の目次作成

しかしこの翻刻は、昭和四年(一九二九)に東京市役所が編纂発行した『東京市史稿』遊園篇では採用されなかった。『市史稿』遊園篇は、遊園別に史料を載せているため、『名園記』記載の「名園」は第一から第三までの三冊に分散して収録された。加えて遊園篇は翻刻の精度も高い。

ところで『視聴草』続編所収の『名園記』では、例外はあるものの、白藤がそれぞれの庭園を訪れた日時や出典が付されている。これは千坂が補記したものに違いない。たとえば、「白川侯大塚別業 金令氏 遺閑紀聞 文化十二年」というように。「金令氏」は「鈴氏」ですなわち鈴木白藤。『遺

閑紀聞』は出典となった白藤の随筆。続いて本文冒頭に「四月四日 精里の誘二而大塚白河の別荘に遊ぶ」とあり、文化十二年（一八一五）四月四日に遊覧したことがわかる。

「浜町稻荷堀酒井雅楽頭別業 遺閑紀聞 乙亥五月条。「乙亥」は文化十二年。本文に「十九日 又精翁の誘にて浜町稻荷堀酒井雅楽頭君之別荘にいたる」とあり、文化十二年五月十九日の来訪と判明する(出典は同じ)。

「松岡侯の別業 夢蕉八卷 壬午十一月」。本文に「廿三日 約して中山備前守 松岡侯 の別業に遊ぶ」。「夢蕉」は前号で紹介した白藤の随筆(日記)。現在所在不明であるだけに貴重だ。「壬午」は文政五年（一八二二）。同年十一月二十三日の遊覧記と知れる。

以上のような情報に基づいて、氏家が『名園記』の記事を年月日順に並び替え新たに作成したのが左の「目次」である。なお『東京市史稿』遊園篇に掲載されている記事については、『市史稿』と注記し巻数と頁数を補った。

目次

- | | | | | | | | | | |
|---|------------|--------------|------|--------|-------------|-------------|---------------------|------|--------|
| ① | 文化七年九月八日 | 郡山侯山林（六義園） | | ① | 文化十四年二月二十二日 | 桃園 | 市史稿三 | 五十九頁 | |
| ② | 文化十年四月五日 | 姫路侯浜町の別荘 | 市史稿三 | 八十八頁 | ② | 文政五年十一月二十三日 | 松岡侯（中山侯）の別業 | 市史稿三 | 四百 |
| ③ | 文化十二年四月四日 | 白川侯大塚別業 | | | ③ | 文政七年 | 月二十日 | 頁 | |
| ④ | 文化十二年四月十三日 | 山王園城院 | 市史稿三 | 二百三十九頁 | ④ | 文政七年八月二十三日 | 又（林氏別荘） | 市史稿二 | 七百二十七頁 |
| ⑤ | 文化十二年五月十五日 | 島原侯箕田別業 | | | ⑤ | 文政七年十月二十二日 | 又（林氏別荘） | 市史稿二 | 七百二十九頁 |
| ⑥ | 文化十二年五月十九日 | 浜町稻荷堀酒井雅楽頭別業 | 市史稿三 | | ⑥ | 文政八年六月二十五日 | 祭酒（林氏）日暮里別業 | 市史稿二 | 七百 |
| | | 八十九頁 | | | ⑦ | 文政八年十一月五日 | 染井藤堂侯の別業 | | |
| ⑦ | 文化十二年六月四日 | 芝新銭座会津中屋敷 | 市史稿一 | 二百六十四頁 | ⑧ | 文政九年三月八日 | 又（島原侯箕田別業） | | |
| | | 十四頁 | | | ⑨ | 天保二年九月二十三日 | 島原侯別荘 | 市史稿一 | 四百三十九頁 |
| ⑧ | 文化十二年六月十三日 | 業平橋畔西尾殿別業 | 市史稿三 | 二百三 | ⑩ | 天保四年四月七日 | 極楽水播磨侯（常州府中藩主松平頼説）邸 | 市史稿三 | 七百四十五頁 |
| | | | | | ⑪ | 天保五年三月十三日 | 麻布長者丸久保帯刀園 | 市史稿三 | 七百四十五頁 |
| | | | | | ⑫ | 年未詳 | 水野羽州中山備州邸 | 我衣十八 | ほか |
| | | | | | ⑬ | 年未詳 | 島津侯園中十景和歌 | 市史稿三 | 四百六十四頁 |
| | | | | | ⑭ | 年未詳 | 牛門十景 | | |
| | | | | | ⑮ | 年未詳 | 東豊山十五景 | | |
| | | | | | ⑯ | 年未詳 | 權樂園十五景 | | |

②7 文政十年四月十日

紀州公御庭之勝景

以上、文化七年（一八一〇）から天保五年（一八三四）まで（未詳を除く）に白藤が遊んだ大名などの庭園である。白藤は文化九年（一八一二）に書物奉行に任ぜられ文政四年（一八二二）に免職となり小普請入りしているから、右の目次の②から⑨までは書物奉行在職時のものである。年齢は文化七年が四十四歳で天保五年が六十八歳。白藤が人並みすぐれて老健だったことを思えば、学識、交遊とも老熟していた二十数年間と言えるかもしれない。ちなみに没年は嘉永四年（一八五二）、享年八十五の大往生だった。

『名園記』の翻刻（一部省略）は当館ホームページ掲載『北の丸』第五十二号にPDFで公開している。原文はそちらをご覧いただくとして、本稿では『名園記』のうち、白藤の書物奉行在職中（一八一二—一八二二）の記事を中心にその概略を紹介したい。

①郡山侯山林（六義園）と染井（巢鴨）の菜園

まずは書物奉行就任前の遊覧記から。

六義園は五代將軍徳川綱吉の寵臣柳沢吉保（一六五八—一七一四）が、駒込の拝領地に造営した別邸の庭園である。柳沢家は武蔵国川越藩主、甲斐国府中藩主を経て享保九年（一七二四）から大和国郡山藩主となり、このため『名園記』では「郡山侯山林」となっている。

記事冒頭に「庚午重九前一日 白藤漫抄 癸巳 甲午上 二十三」とあり、庚午（文化七年）一八一〇）九月八日の遊覧記で、白藤の『漫抄』（前述の東京大学史料編纂所蔵の『漫抄』はそのうちの一冊か）に記載されて

いたことがわかる。では「癸巳」「甲午」はなにを意味しているのだろうか。「癸巳」は天保四年（一八三三）、「甲午」は天保五年を指すに違いない。

白藤の六義園来遊は実は文化七年九月八日ではなかったという疑念も生じるが、記事に登場する渋江長伯が文政十三年（一八三〇）に没しているので、天保四年、五年の来遊はありえない。憶測に過ぎないが『漫抄』も『名園記』も原本は失われたので確認するべきがない）、『漫抄』のうち癸巳と甲午の上（前半）の冊次にも六義園訪問記が収録されていたのだと思われる。

当日、白藤は「水藩」立原甚太郎、同藩四人、「安藤藩」鍋田舎人、「黒川藩」鳥羽桐塙と共に六義園に遊んだ。立原甚太郎（一七八五—一八四〇）は立原杏所の称で知られる水戸藩士で文人画家。立原翠軒の子で、谷文晁らに師事した。

鍋田舎人（一七七八—一八五八）は磐城平藩士（「安藤藩」の称は藩主が安藤家であったことから）で、名は三善。畠山ほかの号がある。この日の「東道」（案内役）は黒川藩士で立原の門弟でもあった鳥羽桐塙だった。黒川藩は越後国蒲原郡黒川に藩庁を置いた譜代の小藩。六義園を造営した柳沢吉保の長男吉里が甲斐国から大和国に移され郡山藩主となった享保九年（一七二四）に、四男の経隆を初代に成立した藩である。郡山藩との関係の深さから、鳥羽は一行のもてなし役を務めたのだろう。

白藤は翌九日に六義園遊覧記を著した。

最初は中野石翁の来遊について。中野石翁（一七六五—一八四二）は小性頭取、小納戸頭取などを務めた旗本で、名は清茂、晩年は碩翁と称した。將軍家齊の側近く仕え、養女（お美代の方）が將軍家齊に寵愛されたこともあって、隠居後も権勢を振るった。

白藤の記事から、彼が文化七年の時点ですでに陰の実力者と目されてい

た様子がうかがえる。

近日楓葉染霜の時、中根石翁を迎ふるか為に園中日々人をやとひ掃洒せしむ、百五十人つゝ也、多キ時ハ三百人余と云相伝ふ、石翁を迎ふる諸侯ハ金を費す事千金ニ及ふと云、近頃去諸侯中根氏を迎ふるに、ギヤマンの手箱の如きものゝ中に小粒判を盛て引肴とすと云、他是を以て推へし、故に役人日々来て園中を検閲す

「中根石翁」は「中野石翁」の誤記であろう（誤記したのが白藤か千坂幾か『名園記』を書写した某かは不明）。ともあれ意識してみよう。

―近日中、中野石翁が訪れるというので、柳沢家は日々百五十人、多い日は三百人を雇つて六義園内を清掃している。（なんと大袈裟なと驚いてはいけない）、石翁を迎える場合、どの大名家も金千両も費やすという。ちかごろ或る大名家では、ギヤマンの手箱のような物に小粒判（二分金）を盛つて、宴席の引き出物（「引肴」）として石翁に供したという。推して知るべし。（將軍の寵臣である）石翁をお迎えするのに微塵も粗相があつてはならぬと、（藩の）役人が日々検閲していた―。

折しも六義園では厳戒体制がしかれていたのである。さすがに役人の検閲中に気ままに遊覧するわけにもいかず、白藤一行は役人退出後によくやうく入園。六義園観賞を終えたときはすでに夕方になっていた（「莊門を出れ八日沈西山」）。

その後白藤らは、立原甚太郎があらかじめアレンジしていた「染井の御菜園」見学に向かった。「染井の御菜園」は寛政十年（一七九八）頃に設置された菜園で「巢鴨御菜園」とも。幕府の医官渋江長伯が管理していた。白藤は菜園の門外に「渋江長伯御預り」と記した「大木標」があつたと書

いている。

渋江長伯（一七六〇―一八三〇）は著名な本草学者で、巢鴨菜園の総官を兼務すると共に幕府の医学館（漢方の研究、教育機関）で本草学を講じた（長伯の履歴と業績については平野満「渋江長伯の本草学研究―物産学の視点から―」『明治大学人文科学研究所紀要』第七十五冊所収に拠る）。

長伯は幕府の命で半年にわたつて蝦夷地で採薬を行い（寛政十一年）、甲州に菜園を創設する（文化六年）など、その活動は精力的で多彩だ。天文方の馬場佐十郎に西洋の硝子製法書を翻訳させ、その製法で硝子器を製造し將軍に献上した。長伯はまた巢鴨（染井）の菜園で羊毛を飼育し毛織物を製造したことも知られる。幕末の江戸切絵図「染井王子巢鴨辺絵図」の「御菜園」に「メンヤウヤシキト云」と付記されているのは、この菜園が「綿羊屋敷」と俗称されていたことを物語っている。

白藤も菜園の綿羊に注目し、その飼育に多くの筆を割いている。

園に入、綿羊百足斗も蓄置、五六疋園を分ち日々出て遊行する所あり、竹垣を以て隔、殆廿所、芝を種たり、広サ百畝斗、御預の人云、冬に至り、綿羊をとらへ四足を縛し、はさみを以て毛を剪ゴロフクレン又羅紗を織る、此綿羊三十程の毛を以て纒に絹壺疋を織と云

―菜園に入ると、飼育する百匹ほどの綿羊を、五、六匹ずつひと囲い（「圈」）に分けて日々運動をさせる区画があつた。囲いの数は二十ほど。それぞれ竹垣で仕切られ、地面には芝を植えてあつた。総面積は「百畝」（約三千坪）くらい。「御預の人」の説明では、冬になると綿羊の足を縛つて缺て毛を切り、その毛で「ゴロフクレン」や羅紗を織るが、「絹」一疋を織るのに三十四分の羊毛が必要だということである―。

「ゴロフクレン」は舶来の毛織物の一種。生地が荒く帯地や合羽地などに用いられた。オランダ語の *grofgrein* に由来し呉組服連とも表記された。薬園ではこの輸入毛織物の国産化を試みていたのである。

白藤は綿羊の様子にも触れている。

夏生れし子ハ多く死す、冬生れし子育す然共冬を恐るゝ事甚し、多く冬厳寒に死す、我輩行て臨めハ恐るゝ事甚敷 皆一所にかたまる、かの欄中に追出すに人の往来を恐れにけ廻る中に、屢蹉跌して倒る、大さ大犬に及ふ、せい高し、角有もあり無もあり、一様ならず、火事の時に入置の備あり、垣につゝき南方に作る圈ハ屋ありて火に及ふを以其地に置也

—夏に生まれた子羊の多くは死ぬ。冬生まれの子羊も寒さに弱く厳寒に耐えきれず死んでしまう。我々（白藤一行）が近づくと綿羊はたいそう怖がり、身を寄せ合つてひと塊になった。（飼育舎から）困いに追い出すときも、（見知らぬ）人間が行き来するのに恐れて逃げ回り、しばしば躓いて転倒した。身体は大きな犬くらいで背はそれより高い。角が生えた羊もいれば生えていない羊もいて一様ではない。南方に火事の際の避難所が設けられている—。

「夜暮草に露多し」。白藤らは日が暮れるまで滞在し、薬園の門を出たのはすでに五時（午後八時頃）近くになっていた。そのため薬園で栽培されている多くの薬草を見たが、暗くてよく観察できなかった。白藤は「園中諸薬を精くみるあたハす、遺恨といひつへし」と残念がっている。薬園では多くの「茶の枝」を折つて一行に分配した（「茶の枝を多く折て諸子二分つ）。理由はさだかでない。

巢鴨通りに出て水戸藩の諸子と別れた白藤ら三人は、空腹のあまり鄙びた蕎麦屋（「政店」）に駆け込んだ。もちろん味は良からうはずがない。白藤は記している。「飢餓頗可厭、然共飢ヲ以て珍膳嘉肴の如し、二椀を食し三椀を喫すれハ飢少く療るを以て其粗を覚ふ」。不味い蕎麦だったが飢えていたので極上の美食のように感じられた。しかしそれも二椀まで。三椀目はさすがに空腹もおさまったのでその粗食に辟易しないではいられなかった、というのである。

白藤は、六義園造営に際し柳沢吉保の権勢を憚つて諸大名が費用を分担した事実にも言及している。「郡山園中の山ハ本郷大根島より土を穿取て作れりといふ、且大石皆筋違橋より運搬す、高さハ八九尺にも及はん、其費ミナ諸藩より出つと云、当时候の気焰赫奕たる事概して知るへし」。

② 姫路侯浜町の別荘

「癸酉随筆のす」とあり、文化十年（一八一三）のもの。「姫路侯浜町の別荘」は播磨国姫路藩の中屋敷で、当時の藩主は酒井忠道である。四月五日、白藤と共に訪問したのは、野村大陵、鈴木幽谷（椿亭）、山内穆亭、古賀精里。

鈴木椿亭（一七六五—一八二九）は通称文（分）右衛門。幕臣（徒目付）で大田南畝の門人。山内穆亭も南畝の門人。古賀精里は前述の通り。幕府の儒官で、柴野栗山、尾藤二洲と共に「寛政三博士」と称された。

③ 白川侯大塚別業

記事冒頭に「金令子 遺閑紀聞 文化十二年」。「金令」は「鈴」で鈴木。

鈴木氏（＝白藤）の『遺閑紀聞』に記載されているというのである。

文化十二年（一八一五）四月四日、白藤は古賀精里の誘いで大塚にある陸奥国白河藩の下屋敷に遊んだ。坪数六、七千坪ほど。折から藤が満開で加えて「銀杏の樹の大なるに花爛漫山蜂数千群をなす」と記している。登場するのは精里のほか広瀬大人、石塚次郎左衛門、土屋七郎、田内主税など。

広瀬大人は白河藩士で、昌平覺で学んだのち白河藩校立教館教授を務めた広瀬蒙斎（一七六八—一八二九）か。だとすれば通称の「大人」は「台八」と表記すべきだが、あるいは両者とも通用していたのかもしれない。

田内も白河藩士か。田内と土屋は森鷗外『伊沢蘭軒』にも登場するが詳しい閲歴はとりあえず不明だ。いずれも文人で、藤の花を賞美するだけでなく詩を作ったの言うまでもない。

記事には「当越州」（白河藩主）と「老侯」も登場する。藩主は松平定永、老侯は「楽翁」松平定信だった。この日、定永は「野遊びの途中に立ち寄る」（意訳）という名目で訪れ、精里、白藤らの来客に「干菓子一重」を贈り、楽翁からは芳茗（上等の茶）を添えた餅菓子一重と「すし」（寿司）が贈られた。「すし」は葎簀で編んだ唐櫃形の容器に収められ、詞書と共に一首の歌が添えられていた。

山里をとひたまふと聞はへれと青葉のミしけりて何のはへもあらし
を藤のはなハかりは今に残りぬらんとおもへは 楽翁

ミ山木のはへなき中の藤の花 かゝるをりとや散のこるらむ

「これといって眼を楽しませる花はありませんが、藤の花だけがなんとか散り残って貴殿らをもてなしてくれるでしょう」という歌意だろう。

白藤らの訪問は、楽翁の日記にも記されていた（岡寫偉久子・山根陸宏

「翻刻『花月日記 松平定信自筆』五」『ビブリア』No. 115所収。すなわち文化十二年卯月四日の条に。

けふハ古河弥助を、大塚のなりどころへまねくときけバ、茶くわしな
ど折に入て、山里をとひ給ふと、きゝ侍れど、青ばのうらしげりて、
何のはへもあらじを、藤の花斗ハ今も残りぬらんと思へバ、とかいて
ミ山木のはへなき中の藤のはなかゝるおりとやちり残るらん

「古河」は「古賀」で弥助は古賀精里の通称。「なりどころ」は別荘を意味する。この日、精里は午前十時頃（四つ時）に訪れ、午後四時過ぎ（七つ過）に帰宅したという。

白藤が白河藩の大塚別荘を訪れ藩主に拝謁するのを許された理由を記したくだりも興味深い。それは通常の旗本には容易に許されなかったことだったようである（白藤は文化九年に書物奉行を拝命し「永永御目見以上」になっていた）。

精里ハ侯の師なれハ論なし、其外は相見以上の人ハ取扱六ヶ敷事也し
か、精里親類ニてと云事ニて取扱手軽くせし故、我行事を得たり、そ
れすら広瀬大人出来りて予に云ハ、今日ハ野遊の路より来らせ給ふつ
もりニて来るといふ事ニ取扱可申候由を申

意識すると。

—同じ幕臣でも、精里は「侯」（白河藩主松平定永）の学問の師だから問題ない。しかし他のお目見え以上の幕臣（「相見以上の人」）の場合は取り扱いが難しい。私は精里の親類（前述のように精里の三男は白藤の女婿）

なので容易に許されたのだ。それでも白河藩側は気を配っていて、広瀬大八は私に「今日は、殿様は野遊びの途中、ここに立ち寄ったことにしておりますので、その旨ご承知ください」と語った。

旗本が非公式に白河藩主に対面するのは、それがたとえ別荘の庭園を觀賞するだけだったとしても、憚られたのである。

④ 山王園成院

「同卷四月の条」とあり、同じく『遺閑紀聞』の記事。文化十二年四月十三日、白藤は山王園成院に遊んだ。小鍋太夫と村川佐一郎が二十日ほどの江戸滞在を終えて帰郷するのを送るべく、古賀精里、友野雄助、行西右近、相原四兵衛、英逸庵、柿伝らと参会した。山王園成院は、日吉山王神社（現在の千代田区永田町二丁目）に所在する日枝神社の社僧円成院か。友野雄助（二七九一—一八四九）は霞舟の号で知られる幕臣で漢詩人。甲府に設けられた学問所、徽典館の学頭を務め、昌平黌関係者と詩社を結成した。参会者は探題（籤で当たった題で詩作する）で詩を作り、あるいは対局（囲碁であろう）して時を過ごした。いかにも文人墨客らしい会だったが昼食にはこっそり寺院にあるまじき物を食した。その場面を白藤は次のように記している。

午飯にハ窃ニ鰻□（氏家注・魚偏に鰻）の蒲焼を持来りて諸子に食ハしむ、魚臭膳椀に転したり、傍に坐する小童甚た怪ミたる顔して給仕せり、勿論座主ハ外に行て不在、此魚のくしともハ如何してん 定めし少ハ怒もしけん、しかし内々にてハ院主も食せしことも有へしと諸子一同に笑を発す

持参した昼食はウナギの蒲焼だった。その臭いが膳椀に移り、給仕の小僧たちが怪しんだ。主人の社僧は外出して不在だから問題ないが、帰宅後すこしは怒るだろう。しかし主人だつてこっそり食したことはあるはず。そう言つて参会者一同笑い飛ばした、というのである。

実は白藤らが寺を借りて詩会を催した際に生臭物を持ち込んだのはこれが初めてではなかった。「去年の会にハ猪肉を持たりしか」という記述を見れば明らかである。

⑤ 島原侯箕田別業

「同卷五月の条」。文化十二年五月十五日、かねて精里（精翁）から誘いがあつた三田三丁目の「嶋原侯松平主殿頭別荘」（中屋敷）に出かけた。島原（肥前国島原藩）侯は、松平忠馮。この日の朝、白藤は「鈴分君」（鈴木幽谷、椿亭）と共に同所を訪れた。すでに広瀬大八（台八）、柿伝、土屋七郎、石塚次郎左衛門などが来ていて、あとになって加藤俊次も加わつた。精里は麻布竜土町の「伊達遠江守君」（伊予国宇和島藩主伊達村壽）の屋敷に講義に出かけていたが、講義を終えてやつて来た。近距離とて駕籠を辞して徒歩で訪れたのだが、思ったより遠く、折からの酷暑で汗だくだった（「流汗衣を浸し淋漓玉をなす」）。

庭園は秀逸で「園中数千歩景致いふ計なし」。白藤ら参会した諸子は例によつて詩を作り、対局している。一同を案内したのは島原藩士で精里の門弟でもあつた佐久間喜一郎。この日、白藤は風邪気味で、熱があつたうえ

鼻水や咳が止まらない散々な状態だった。

それでも白藤にとつては有意義な一日だった。ひとつは白河藩が所蔵する「結城家古文書」を借覧する約束を取り付けたこと。同藩の広瀬大八(蒙齋)に打診したところ、快諾を得たのである(「一諾して許す」。そのせいもあって白藤は広瀬を「此人温厚にして少く洒落を帯、少しも岸崖なし」と好意的に評している。温厚で洒脱で偏屈(「岸崖」)なところが微塵もないというのである。

もうひとつ、柿予(柿伝 未考)とは武術について貴重なやりとりがあった。武術を好む柿伝から、「楓山倉」(紅葉山文庫)に『練兵実記』(中国明代の兵法書)が所蔵されているかと尋ねられた白藤は、これを機に自身の佩刀(「兼常の刀」)を柿伝に示して意見を求めた。柿伝が刀剣に関する蘊蓄を存分に披露したのは言うまでもない。

精里は参会した諸子に対して「今日の侯ハ詩を能作り玉へり、尋常の作にあらず 心得へし」と語った。「当邸の主人(松平主殿頭)は詩人としてもすぐれている。貴君たちもそう心得て詩を作るように」(下手な詩を作ってはならない)というのだ。ただでさえ詩作が得意でない白藤はこの言葉がプレッシャーになり、容易に詩句が思い浮かばなかった(「我輩もとより拙なるが 此事に聳て常に遅吟なるがいよいよ意阻て句不成」)。

白藤が記事の中で多くの筆を割いているのは、藩侯の祖で慶長五年(一六〇〇)に鳥居元忠らと共に伏見城を守護して戦死した松平家忠(一五五五—一六〇〇)の「無双の忠節」と武勲である。「伏見一城の人視死如帰」「利を以て誘とも不動、害を以て恐れしむれとも少しもおそるゝ色なし」。白藤が作った詩句もその功績を讃えたものだった。「国史流传三世節 君恩堅固数朝侯」。白藤は自分の詩句は「諛言」(お世辞)のように見えるかもしれないが、真実心の奥から出たものであると断っている。

庭園は海上を一望し樹間に富士(「芙蓉」)も眺められる。そんな江戸随一の園(「都下最第一の園と覚ゆ」)で、白藤らは海上に上る月を觀賞しようとし暮れまで滞在したが、あいにくの曇天で月を見ぬまま三田の別荘(中屋敷)をあとにした。

⑥ 浜町稻荷堀酒井雅楽頭別業

「遺閑記聞乙亥五月条」。場所は②の「姫路侯浜町の別荘」と同じ。ただし②は文化十年四月五日だったが、こちらは文化十二年五月十九日、姫路藩主は酒井忠道から酒井忠実に変わっていた。きっかけはやはり精里の誘いで、白藤は勤務を終えてから午後二時頃に参上した(「退衙より八つ時に行」)。ほかに広瀬大八、石塚次郎左衛門らも参会した。白藤らを迎えたのは、三十年も前に昌平齋の学舎に入学した老儒の田中新助(名は熹)と高須七郎太夫(名は裕)だった。

藩侯から「道明寺のあんころ(氏家注・いわゆる桜餅)」「かしハもち(栢餅)の如く葉なき物黄白成」そして「にしめ(煮しめ)」を詰めた三重が下され、ほかに某氏からも「すし一盤」「鯛の煎たるとさし身一盤」と「吸物」が供された。精里は早めに退出し、白藤は諸子と共に別業を出た。帰途、鎌倉河岸の辺りで大雨に見舞われ、「麴亭」(蕎麦屋)で蕎麦を食しながら雨宿り。雉子橋、牛淵などを経て帰宅した白藤が、家の者に雨の様子を問うと「一点の雨なし」と言う。白藤は感慨深げに「百里不同雨」よりも甚だしいと記している。

⑦芝新錢坐会津中屋敷

「同上六月条」。文化十二年六月四日、精里の誘いで芝新錢座の会津藩中屋敷に遊ぶ。参会者は、精里、白藤のほか友野、石塚、(山内) 穆亭、鈴木(椿亭) ほか。会津藩からは、文化十年に藩命で昌平黌に入学し精里や林述斎に師事した牧原只四郎(号は半陶。一七八六—一八四二)も加わった。

当屋敷の「十二景」を称賛した「朝鮮人南秋月」(朝鮮使節製造官の南玉)の「亭記」を発見した白藤は、これを書きとめた。—双蓮池、竹裡徑、酔月岡、春樹堤、白泉橋、偃松嶼、聞潮亭、映雪館、秋香園、涼風舎、匹練瀑、夕照林—。映雪館からは富士山が望め、聞潮亭は眼下に「品海」が広がっていた(会津藩中屋敷の東は海水を隔てて「浜御庭」に面している)。しかし匹練瀑は名のみで水は枯れていた。

この日の最上のもてなしは、通常は許していない庭内での釣りを特別に許可したことだろう。鈴木、石塚、山内、友野の諸子は池に舟を浮かべて釣りに興じた。釣果は、五、六寸と九寸一尺余の鮒をそれぞれ二十尾ほど。七つ時(午後四時頃)にはさらに二十尾余を釣り上げた。実は庭内の池では、現在の藩侯(松平容衆、この年十三歳)が幼年だったため、ここ十年釣りが行われていなかった。大きな鮒が釣れたのはそのためだろうと白藤は記している(「故二池中皆魚肥て」。あまりよく釣れるので、鈴木椿亭(「鈴分」と石塚は詩を作らず、鈴木に至っては池で遊泳を試みた(「鈴分少し水を試み遊泳せり」)。水泳に長じていたとはいえ久しぶりだったのでひどく疲労した様子だった(「覆没沈浮平生の技を逞ふす、久く廃せし業故二や疲たる事甚し」)。

例によって対局したが白藤は惨敗(「予敗する事甚し」)。詩作も行われた。「十二景を分て五律壹首つゝ作らんとて題を分つ」。十二景を題材に諸子で

一首ずつ作詩したのだろう。この日の遊覧を白藤は最近では一番楽しかったと振り返っている(「凡今日の楽ハ近来如此の事を不覚」)。理由は、景色の素晴らしさ、釣果の豊富さ、そして涼風(「景色一也、釣魚を得る事多し二也、涼風三也」)。食事も満足いくものだった。大重箱に「饅頭いまさか」(饅頭と今坂餅か)、干菓子と「上あんの餅菓子」各一重。「すし」一盆。昼食も供された。池で釣った鮒とキュウリを膾にした一品も。日が暮れて諸子と帰途に着いた。すでに満腹であったのに、晩食に蕎麦を食したのでお腹が苦しくなった(「飽満にたへす」)。

中屋敷を退出するとき、諸子に鮒一尾が土産として渡された。家で食したところ、鮒は腹におびただしく卵をはらんでいて美味であった。欲を言えば季節が夏だったこと。「恨らくハ秋末冬初に釣り得てこれを食せざる事」。寒くなればさらに美味に違いないというのだ。

万事よし。いや、白藤と穆亭の二人はなぜか物足りなさを感じ、秘かに語り合った(「予ひとり穆亭と此事をひそかに語して嘆息する而已」)。物足りない「此事」とはなにか。白藤は「恨る所ハ蓮池舟を浮へて盪棹の翠鬢なし」と記している。池に釣り舟を浮べたのはよいが、できれば翠の黒髪の女性に棹を操ってほしかった、というのである。白藤は女好きだった。

⑧業平橋畔西尾殿別業

「同卷六月の条」。文化十二年六月十三日、精里の誘いで本所業平橋の西にある遠江国横須賀藩の別業(下屋敷)に遊んだ。当時の藩主は西尾忠善。

白藤は早朝に食事をとり(「尊食して」)、崑崗(友野霞舟)、大陵(野村大陵)と同道して出かけた。参加を予定していた幽谷(鈴木椿亭)と穆亭(山内穆亭)はそれぞれ「公事」と「風」(風邪)で欠席。途中、巴屋という茶

屋で昼食と晩食の仕出しを注文した（「昼と晩の食を買ふ」）。

横須賀藩の別業は、二万坪の敷地に九つの橋が掛かり六つの亭が設けられていた。園中は田舎の景色そのまま、百姓夫婦が耕作する様は田園の風趣に富んでいた。もてなし役（「東道の主人」）は去年精里に入塾した土屋慎三という人。崑崗と小太郎（古賀侗庵）は座を立てて釣りに熱中し、白藤は大陵と亭の二階で詩を吟詠した。「涼風秋の如し」。

持参したおにぎり（「団飯」）で空腹を癒しているうちに巴屋から昼食が届いた。値段は金二分。献立は「七八寸の鯛の塩焼」「大あぢねぎの手巻束に切たるむま煎」「鶏卵」「大切こぶの酒煎」。加えて「香の物き瓜」「大根味噌漬」「茄子新漬」「赤糸ひ」「新しいも入」「薄葛」等々。酒も二合ほど添えられていた。食後、小太郎は相変わらず釣りに耽り、白藤は園内を散策した。

そうこうするうちに晩食（「夜食」）が届けられた。「き瓜塩おしに味醂酒かけし干鰹をおほひ、焼る多ひと自然生 大椎茸 切たる豆ふ、焼たる十六さゝげを煎て大鉢に堆く盛て焼たる団飯」。巴屋がこれらを「切ため」（切溜。料理などを入れる漆塗りの木箱）に入れて持参したのである。

釣果は、小太郎が一尺二、三寸の鰻と五寸ほどの鮒各一尾。諸子も三、四寸の鮒を三、四十尾釣り上げた。先日の会津藩中屋敷に比べると見劣りしたが、小太郎は誇らしげだった（「誇て不止」）。涼風とご馳走。楽しい一日だったが、蚊の多いのには辟易した。なにしろ二重の衣の上から錐のように肌を刺すのだから（「衣二重を透して膚を嘔事錐にて刺か如し 痛忍ふへからず」）。

園中には名所があった。土屋は、浮床、春浪店、招圃軒、風雲庵、小蓬壺、橋東園の六ヶ所が「園中六景」であると語った。別業を出たときはもう日が暮れていた。白藤と篁園（野村篁園）の間で、病気で来なかった山

内穆亭についてこんな会話がかわされた。篁園が、山内は少々の病なら出てくればよかったのに、と言うと、白藤は、彼は「執袴」の気風で病をとでも恐れるのです、と応じた。「執袴」は貴公子が着用する白い練絹の袴で、貴族の子弟を意味し、転じて柔弱な男子を指す。それに比べて自分などは、高熱と激しい咳で苦しみながら、先日（五月十五日）島原藩中屋敷に出かけたと誇らしげに語った。

⑨ 桃園

「夢蕉 文化十四年丁丑二月の条」とあり、現在存在が知られていない『夢蕉』の記事が出典。その下に「常円寺の桜をみて帰り二遊ひたるおもむき也 初を略して桃園計ヲ取」とあるのは、千坂畿の記であろう。

二月二十二日、白藤一行は常円寺（現在の西新宿七丁目）で桜見物をしたのち「桃園」（中野三丁目）へ向かった。途中、淀橋の手前、「菅廟」（現在の成子天神社か）の左手の茶店で白藤は美しい娘に目を止めた。「茶店に処女老人年十四五計姿色絶倫なるかたてり、諸子皆賞賛す、此婦ハ近隣有名の人なる由」。茶店の娘は近隣で評判の看板娘だった。

「桃園」は、五代將軍綱吉の時代に犬の保護のため設けられた「中野大小屋」の跡地に、八代將軍吉宗の命で設置された桃園。隅田川堤や王子飛鳥山の桜と同様、將軍の威光を示すと共に、江戸庶民に素敵な行楽地を提供した。

白藤に同行したのは、植木玉屋と山内穆亭。桃の花はすでに盛りを過ぎていたが（「残桃少しく花あり」）、白藤らは園丁に懇請して「御座台」の傍に席を設け、山内が持参した一瓢の酒のどを潤した。「御座台」は吉宗が来遊の際に腰かけた場所であろう。「興致甚適せり」。興に乗って詩句もこ

ぼれ出た。白藤は「数対遺芳御座頭 戴花明主好風流 村翁說道當時事 遊
獵回頭八十秋」と詠み、植木は即座に「憶昔紅霞照眼明 遺芳猶自引都人
唐家芍藥隋家柳 不比桃園教樹春」と詠んだ。植木玉厓（一七八一—一八
三九）は通称八三郎、桂里・半可山人とも号した。昌平覺幕臣漢詩人の一
人で、狂詩の作者として知られている。

白藤は続いて吉宗（「有徳廟」）の功績を称える。武を蔑ろにして柔弱に
堕していた都下（江戸）の風紀を引き締め「武威儼然」とした気風に改め
たのがその一つ。桜や桃を植えるなど文化的な事業にも意を注いだのがそ
の二。吉宗はまさに「右文武の徳」（文武兼備）の將軍であり、一代の盛
徳は中国における中興の明主「光武昭烈」（洪武帝と昭烈帝）に勝ると断言
している。当時書物奉行の役職に在った白藤は、当然のことながら紅葉山
文庫の蔵書を充実させた吉宗の功績に触れないではいられない。「吾楓山書
庫図書集成を始とし数百部の書皆其御時に収蔵あり」。『古今図書集成』ほ
か多くの貴重書が吉宗の時代に蔵書に加えられたというのだ。

どれほど桃園で過ごしたのかは定かでない。帰路、淀橋辺の茶店に腰掛
けて食事をした白藤は、その不味さを「硬飯不可下咽、菜亦賤品にして不
可」と記している。米飯は硬くて容易に喉を通らず、菜（おかず）もひど
い。食事は期待に遠く及ばなかったが、店に置かれていた経机は古色愛す
べき品だった。これに目をつけた山内は、譲ってくれないかと店主に購入
を申し入れたが、長年所持し度々の火災も免れた品（「久しく伝へたる者に
して度々の火を免れしもの也」）なのでと断られてしまった。

書物奉行免職後の主な登場人物

以上が①および書物奉行在職中（②～⑨）の記事の概略。⑩松岡侯の別

業以降、⑪麻布長者丸久保帯刀園までは、白藤が文政四年（一八二一）十
二月二十四日に免職となり小普請入りした以降のものである（⑫水野羽州
中山備前邸は年未詳）。出典は、⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯が『夢蕉』、⑰⑱⑲⑳が「金
令氏遺稿」、㉑『漫筆』、㉒『漫抄』とある。

書物奉行を免職になった以降も、江戸庭園訪問記は相変わらず興味深い
内容に富み、参会した諸子の顔ぶれも多彩だ。うち代表的な人物を挙げて
おこう。

屋代弘賢（一七五八—一八四一） 通称太郎（正しくは大郎か）、号は

輪池。能書家、歌人、国学者、蔵書家として知られる幕臣。『寛政重
修諸家譜』『藩翰譜続編』などの編纂に参加し、『古今要覧稿』の編
纂を主宰したことで知られる。

屋代は、⑩中山侯別業（文政六年四月二十六日訪問）の記事に「屋代太
郎」として登場する。「中山侯」は水戸藩付家老で常陸国松岡藩の藩主中山
信情。屋代は同別業（松岡藩下戸塚村抱屋敷。その庭園は「懽樂園」で和
歌数首を詠んだ。うち一首「十余り五つの景色備れる園のうちにて千代も
経ぬへし」について、白藤は「太郎か哥ハ俳諧体か古風か人の評をまつ」
と記している。

勝田半齋（一七八〇—一八三一） 名は献、通称弥十郎。能書家で詩文

に長けた。学問所勤番、徒目付、学問所勤番組頭を経て文政十一年
（一八二八）に書物奉行を拝命し、在職中の天保二年（一八三一）
に五十二歳で没。清貧に生きる術を語った『貧政』の著で知られる。

勝田は「勝田」「勝田半齋」「勝田氏」「半齋」の称で、⑩から⑲までの記
事に登場する。すなわち文政五年（一八二二）十一月から同八年（一八二

五)十一月まで。残念ながら書物奉行時代の記事はない。勝田は文化十四年(一八一七)に徒目付に転じ、文政七年(一八二四)四月十九日に学問所勤番組頭になっているから、⑩⑪は徒目付、⑫から⑰の間は学問所勤番組頭である。

勝田に関しては、文政七年八月二十三日に谷中の林氏(林述斎)の別荘を訪れた際の記事(⑭)が興味深い。当日、白藤は穆亭とその義弟(妻の弟)と一緒に林氏別荘へ向かった。途中「雁金屋」に立ち寄った白藤は、『史鱗』という漢籍を発見した。「雁金屋」とは『江戸買物独案内』(文政七年刊)に載っている小石川伝通院前の書物問屋、青山堂(店主は雁金屋清吉)であろう。

雁金屋ニ息ふ、史鱗をみる、此書ハ昔年昌平ニありし時写せしか 纒三分か一にして転官せし故、事を終らす、楓山ニも此書あれとも、外の書を写せし故卒業せさりし也、此頃勝田半斎ニ托して窃に昌平の書を借らん事をはかりしか共、近来書の出入甚厳にして事難成、空く其事罷ミしか 不慮にみる事を得たり、尾藤約山の書にて静寄軒の印あり

『史鱗』を見つけた白藤は、かつて学問所勤番組頭として昌平覺に務めていた折にこの書物を三分の一まで書写したことを思い出した。しかしその後、書物奉行に栄転したため書写は中断。同書は紅葉山文庫(「楓山」)も所蔵していたが、紅葉山文庫には他に書写したい書籍が多く、そちらに精力を注いだので『史鱗』の写本は未完成のまま。今年、勝田半斎が学問所勤番組頭になったので、これ幸いと昌平覺が所蔵する『史鱗』を借り出そうとしたところ…。

勝田が「最近昌平覺では蔵書の出納管理が厳しくなったので、書籍の持ち出しはできない」と言うので白藤はあきらめざるをえなかった。ともあれ思いがけない書物を見つけたと懐かし気に書きとめたのである。雁金屋の『史鱗』は尾藤約山の旧蔵書で、同人の蔵書印「静寄軒」が押されていた。尾藤約山(尾藤二洲の名で知られる)は、昌平覺の教官を務めた幕府の儒官。蔵書印は正確には「静寄軒蔵書記」だったかもしれない。

鈴木桃野 (一八〇〇—一八五三) 名は夔、通称孫兵衛。桃野、詩瀑山人、酔桃子等と号した。白藤の男で姉は古賀侗庵の妻。昌平覺教授。

『反古のうらがき』『無可有郷』などの著書あり。

桃野は白藤の記事に「豚児」として登場する。「豚児」は自身の息子をへりくだって言う称で、「豚児」(桃野)は⑩⑪に参会(年齢は二十三、二十四歳)。文政六年四月二十六日に中山侯の別業に参会したおりに「内山氏」と共に隷書を記している。「内山氏」は内山一谷、名は謙、通称謙太郎。歌人、狂歌人として知られる内山椿軒の孫。文政七年に白藤が⑬「林氏別荘」を訪れたときは、当初桃野も参加予定だったが、「天気陰雲故ニ不行」とある。

平野繁十郎 (一七九六—一八五七) 名は祐長、字を子純。恵園と号した。肥前国長崎の唐通事の家生まれ、稽古通事、小通事を経て大通事に昇進。

⑬に「平野繁十郎憑資字子純、号蕙園」が参会。白藤が「燕子花」(カキツバタ)を「華人」は何と称しているかと尋ねたところ、「紫燕」と答えたところとある。

白藤は平野の言葉について「言語甚低し、加之方言国語多き故、聞取悪

キ事あり」とも書いている。方言が強くて聞き取りにくいというのだ。「崎陽」（長崎）の方言についてはさらに「馬場氏」を例に挙げて、こう記している。「馬場氏江戸ニある久し、一の遊治人也しか 言語ハ難渋也し」。「馬場氏」は、長崎の阿蘭陀通詞で文化五年（一八〇八）に天文方に蕃書和解御用局が設置されたのにもない天文方に仕を命じられた馬場佐十郎貞由（一七八七—一八二二）であろう。馬場は無類の放蕩者（「遊治人」）だったにもかかわらず江戸では言葉が通じ難くて難渋した、というのである。もうひとり、白藤とも馬場佐十郎とも縁の深い高橋作左衛門景保も挙げなければならぬ。

高橋景保（一七八五—一八二九） 通称作左衛門。観巢、求己堂主人、蛮蕪などと号した。文化十一年（一八一四）に書物奉行を拝命、天文筆頭を兼ねた。文政十一年（一八二八）にシーボルト事件で投獄され、翌年獄死。天文学のほか世界地図の作成や翻訳に従事し、満州語研究の先駆者としても知られる。

高橋は書物奉行として白藤の二年後輩で、白藤免職の七年後に入獄。白藤の記事では「高橋氏」あるいは「観巢」と呼ばれている。特筆すべきは、白藤らが文政六年四月二十六日に中山侯（中山信情）の抱屋敷を訪れた際に高橋に「蘭服」を借りた記事である。

四月二十五日早朝、白藤は高橋を訪れ、高橋が所蔵する「蘭服」（オランダ人の服）を借り、翌二十六日午前、蘭服を携えて帰宅した（二十五日は高橋宅に一泊したようだ）。なんのために。この日、中山侯別荘で参会者に披露する（座中の観に供する也）ためだった。一方、主人の中山侯は「明服」を着て一同を迎えた。文政六年（一八二三）のオランダコスプレ&チャイナコスプレ。三十前の若い殿様と知識人たちの、知的で悪戯っぽい遊び

心の表れだろう。

ところで『市史稿』では「明服」を「胴服」と翻刻し、鈴木貞夫「権楽園―松岡藩下戸塚村抱屋敷（4）」（公益社団法人新宿法人会広報誌『しんじゅく』連載／新宿歴史よもやま話七十八）もそれに従っている。しかし『視聴草』の当該箇所は「明服」と判読され、加えて侯の服装について述べたくだりにも「舜水の持来れる服の由、其様を模せしかとも絹ハ日本ニなき地合故似たるを以て製せり」とある。「舜水」は万治二年（一六五九）に長崎に亡命したのち帰化して水戸藩に仕えた中国人儒学者朱舜水（一六〇〇—一六八二）。代々明朝に仕える家に生まれ、明朝滅亡後もその再興を図った彼が中国から持参した服は「明服」だったに違いない。この日侯が詠んだ詩句に「偶着明時服」とあり、白藤の詩句にも「衣裳曾見明時服」とある。

白藤は「蘭服」についてこんな話も書いている。

亀里氏蘭服を借らん事を請ふ、予曰 服の事易々 只願くハ其持主を
秘し玉ハん事をと目録を添へて借送る

「亀里氏」はのちに学問所勤番組頭を務めた亀里権左衛門（名は章、字は子含）。中山侯の学問の師で、権楽園は弟の加藤忠蔵が管理していた（鈴木貞夫「権楽園―松岡藩下戸塚村抱屋敷（1）」）。亀里が蘭服を拝借したいと申し入れたのに対して、白藤は、持ち主である高橋の名を秘するという条件付きでこれを快諾したというのである。書物奉行兼天文方筆頭で蘭書の翻訳も行う高橋とはいえ、さすがに蘭服を公然と所持し貸し出すのは憚られたのだろう。すくなくとも白藤はそう慮って、亀里にくぎを刺したのだった。

以上、『名園記』の内容の一部を紹介した。「一部」は「ごく一部」と言い換えるべきかもしれない。なぜなら白藤は各庭園の景観や趣向を詳しく紹介するだけでなく、さまざまな事柄（食べ物、遊戯、天候：等々）に言及し、登場する人物もまた多彩だからである。とりわけ昌平齋を中心とする知識人たちの交遊や詩作の現場が書きとめられているのは貴重だ。それは『書物奉行と紅葉山文庫』というテーマを超えて、江戸後期の知識人社会の一角を鮮やかに照らし出していると言っても過言ではない。

ホームページに掲載した【翻刻】でぜひその全体をご覧いただきたい。なお翻刻で用いた記号、表記などの凡例は以下の通りである。

「」 空白箇所（文字が欠けている）

■ 判読できなかった文字

□ 表記できない漢字の表示 □（魚偏に麗）など

【図】 原文に図のある箇所

（||） 人名などの補足 例恭（||白藤） 杜鵑花（||サツキ）

（） 推測 例「行て行て」（衍字か）

「く」 繰り返し 例「何く」（何々）

「」 割書きの改行箇所

*このほか本文中の語句の肩や傍に何らかの表記がある場合は、「右傍」「右肩」などとして（）内に補い、本文欄外の注記についてもこれを補記した。

（専門調査員）